



第5ステージ 四大学合同ステージ

男声合唱組曲 『達治と濤聲』

[当演奏会委嘱初演作品]

■作 詩：三好 達治  
 ■作 曲：多田 武彦  
 ■指 揮：山脇 卓也

- ・不知火か
- ・すみれぐさ
- ・荒犬薄暮
- ・紅花一輪
- ・九十九里ヶ濱

鳴呼・東西四連 作曲家：多田武彦

終戦翌年の1946年、旧制中学4年生の私は「将来映画監督になってミュージカル映画を作りたい」と思い、独学で和声学と楽式論の勉強を始めた。1947年、運良く旧制大阪高校に進学した直後コーラス部に勧誘され入部したが、合唱音楽のことは何も判らない儘2年目が過ぎた。3年目になると戦後の学制改革により、旧制高校はこの年限りで無くなることになり、学校も3年生だけが最後の授業を受けることになった。

コーラス部も活動中止となった或る日、部室に、関西学院グリークラブ50周年記念演奏会の招待状が投函されていた。友人を誘ってみたが誰も行かないので、当日一人で聴きに行くことにした。1949年5月5日、私がア・カペラ男声合唱の素晴らしさに開眼させられた記念日である。シューベルト作曲の「夜」に差し掛ったとき「人間の声だけで、多彩なリズム・メロディー・和声・楽式によって見事に構築されていく音楽の崇高さ」に感動させられた瞬間であった。

1950年、京都大学に進学、すぐ京大合唱団に入った。「こいつは多少音楽理論を知っているな」と見た先輩たちの指示で、この年の秋に男声合唱団の指揮者となった。

然し指揮の経験は無かったので、下宿に近い同志社大学内の栄光館で行われていた同志社グリークラブの練習を何度か見学にいった。関西で関西学院グリークラブと共に双璧と称せられる同志社グリークラブの縹色（はなだいろ）の清澄な音色で奏でられる宗教音楽・日本民謡・外国の民謡・スピリチュアルなどの名演奏から、教えられることが多かった。

1952年、京大男声合唱団は、関東の雄、早稲田大学グリークラブ・慶應義塾ワグネル・ソサィエティー男声合唱団との交歓演奏会を開催する機会を得た。百名近い団員を擁する早稲田大学グリークラブのダイナミックな演奏・正統派的発声による慶應義塾ワグネル・ソサィエティー男声合唱団の精緻なアンサンブルによる演奏に接し、これら東西四大学男声合唱団の凄さを知った。処女作「柳河風俗詩」を作曲した2年前に私は既に、東西四連の水準の高さを知っていたことになる。これを契機に私は、東西四連やその四団体の演奏会に足繁く通っていた。

処女作「柳河風俗詩」以降60年間、恩師山田耕筰・清水脩・林雄一郎・畑中良輔の諸先生からの「多田君、お前の作風に合うのは、大正・昭和時代の日本近代詩だから、その中からア・カペラ男声合唱曲に馴染む名作を選んで作曲しろ」とのご薫陶に従い、専ら、ア・カペラ男声合唱組曲を書き続けて来た。東西四連各団の演奏会や東西四連の合同ステージで私の作品を採り上げて頂いたり、各団の演奏会の為の新作の依頼を受けたりしたが、東西四連の合同ステージの為の新作の委嘱は今回が初めてであった。

「若さに満ち満ちた、演奏技量の卓絶した200名以上のメンバーに呼応する作品」として、また前述の恩師のご教導に応えるべく、三好達治先生の「濤聲」を主軸とした詩を選ぶこととした。

三好達治先生の生地は大阪市東区（現・中央区）南久宝寺町。私の生地は大阪市南区（現・中央区）大宝寺町西之丁から北へ2kmほどの所。そんなご縁を感じて私は学生時代から何度か三好先生の詩にも作曲を試みたが、果たすことは出来なかった。

三好先生の詩に漂う抒情は、時に広大に、時に可憐に変化する。然しその底流には、常に三好先生ならではの人生観・宗教観が存在していた。この特質に無頓着なまま、音だけを追い掛けて作曲しようとしていた自分の浅はかさに気が付き、私は1977年以降今日まで、三好達治の詩による男声合唱組曲『海に寄せる歌』『わがふるき日のうた』『追憶の窓』『秋風裡』『百たびののち』『達治の旅情』『花筐』『鳥の歌』と、混声合唱組曲『季節のたより』を作曲した。

今回は詩集から瀟聲（トウセイ）【おおなみの音の意】三篇を選び、第一・第三・第五曲目に配置し、更に、組曲構成上、間奏曲風の穏やかな二篇を選び、第二・第四曲目に設定し、組曲の標題を『達治と瀟聲』とした。

今年の定演幹事は早稲田大学グリークラブ。幹事団体が合同ステージの指揮者を指名することとなっており、早稲田大学グリークラブOBの山脇卓也氏が指揮をする。

(ここで山脇卓也氏との出会いについて触れてみたい)

1997年の東西四連定期演奏会合同ステージで、私は自作の組曲「富士山」の指揮を仰せつかったが、この時が山脇氏との初対面。彼は早稲田大学理工学部の4回生で、早稲田大学グリークラブの学生指揮者だった。明朗闊達な好男子で音楽に対する意見や質問事項を単刀直入に述べてくる。その内容も正統的で論旨もしっかりしていた。爾後私はこの好印象をずっと持ち続けていて、機会があれば歓談したいと思っていたのだが11年の歳月が流れた。

2008年、早稲田大学グリークラブの創立100周年記念演奏会開催を前にして、当時の早稲田大学グリークラブOB会の幹事長だった武内正氏から「百周年記念演奏会のための新曲を、小田和正・荻久保和明の両氏に頼んでいるが、多田氏にも……」とお申し出があった。急遽、詩人丸山薫先生の「帆船の子」に作曲をし持参すると武内氏から「指揮者について、希望は……」と訊ねられたので「この曲の指揮者には、山脇卓也氏が相応しい」とお願いした。予期したとおり彼は、名初演をしてくれた。

今回の『達治と瀟聲』について「詩と音楽との複合芸術の観点からの見解」と「三月の全体練習の後の様子」を訊ねた処、彼は7年前の「帆船の子」の初演時より驚異的な成長を遂げていて、「五篇の詩情の特質・個々の詩の配列の妙・個々の楽曲の構築性と装飾性の使い分け・枝葉末節に捉われない骨太の解釈」など、詩と音楽との複合芸術の具現化に必要な事項を選別し、既に、名初演への道筋を洞察していた。

百年以上の歴史と伝統を受け継ぐ東西四連の若人たちの卓絶した演奏技術によって、今年の定期演奏会は華々しい成果を齎らすことだろう。末筆ながら、東西四連の弥栄とご来場各位のご健勝ご幸福を心からお祈り申し上げます。